

1 書物としての聖書

今日は「聖書を学ぶ意味」と題して、聖書について、いろいろ話しをしてみたいと思います。

「聖書」そのものを取り上げてみようと思いついたのは、尚綱学院中高の朝の礼拝に出ていてです。

尚綱の中高では、毎朝八時半から二十分ぐらい、九〇〇人入る講堂(礼拝堂)で全員集まり、礼拝をしています。生徒は皆、聖書と讃美歌を、小さな白っぽいバッグに入れてきます。この聖書用の小さなバッグをもって集まってくることに、わたしはとても感動したのです。

こんなふうに聖書を大切にしている。いまもそうでしょうけれど、日曜学校、教会学校の子どもたちも、たいてい小さなかばんに聖書を入れて通ってきます。キリスト教学校も、教会学校も、聖書の学校なんですね。センチメンタルなことをいえば、私もそんなふうに通っていた、記憶は薄くなっていますが、そんな思い出もないわけではありません。

ただこれも、大学生ぐらいになると、キリスト教の大学では、聖書の授業があるわけですが、変な大きさの分厚い聖書、おしゃれをぶちこわすような代物ですから、教室にももってこなくなりまして。先生方は、もってこいと、口を酸っぱくして言わざるをえなくなりまして。

そして教会の礼拝、日本の教会では、自分の持ち物としても聖書を大切にし、持参し礼拝に参加します。

これが当たり前と思っけていますけれど、例えば、私が経験したかぎりのドイツの教会などは、自分の聖書はもっていかない、たいてい備え付けで済ましています。それだけ世の中に広まっている、どこにでもあるものになっているということができます。日本の場合は、明治の昔から、聖書自身が珍しいもの、特別なものと受けとめられたでしょう。どこにもあるものではなかった。それがいまにつながっているように思います。

日本における聖書の歴史を振り返ってみると、キリシタン時代は別にして、一八五九年(安政六)、つまり明治維新の九年前ですが、六人の宣教師がアメリカから来たことに遡ります。

一八五九年というのは、ペリーが浦賀に来てから六年後です。六人の宣教師は日本とアメリカの条約にもとづいて来日が許可されたのですが、ご存じのようにすぐ集会をしたり、教会を建てたりできたわけではありません。正式には、一八七三(明治)に伝道ができるようになります。日本に来てから一四年、宣教師たちは、日本伝道の準備をします。その一つが、聖書翻訳でした。そのための日本語と英語の辞書をつくったりして準備し、一八八〇年になって、私たちがいま使っている聖書の一番最初の形のもので出版されます。

こうして一冊の本としての日本語の聖書が生まれるわけですが(英語のバイブルは本の意味)、もちろん私たち、本の宗教になってはいけません。神様がこの本によつ

て私たちに語っている、神の霊の力がこの本によって私たちに働いているというように、あくまでその中身といえますか、聖書が語っていること、伝えようとしていること、証していることに注意しなければならぬことは当然です。しかし神様は、何よりも、はっきりと、確実に、強くこの聖書によって語ってくださっているわけですから、書物としての聖書を私たちが大切にすることも当然のことです。聖書がここにあるということは、神様がここにおられることを示しているのです。私たちにとってそれ以上の神の存在証明はないのです。

こうしたことに気がつくには、時間がかかります。しかしこうした聖書に、教会学校で、またキリスト教の学校で、中学高校、大学で、毎日触れているということ、いまは、おそらく中高生の皆さんは、あまり思わないかもしれませんが、それは、どんなに素晴らしいことか、少しずつ分かってくる、後で分かってくる、振り返ってわかってくるものでもあります。

聖書が自分にとってかけがえのない一冊だということ、これは、ここにおられる皆さんにとってそうであると思います。聖書との出会いが、自分の人生を変えた、それは私たちが多くが経験していることです。また聖書に支えられているということはあるのです。

今から、何十年前も前、私は中学生の頃ですが、スウェーデン出身の国連事務総長ダグ・ハマーショルドが飛行機事故で現役で亡くなったことがありました。暗殺ではなかったかと、後に、かまびすく、長く取り上げられていたことでしたが、その後しばらくして、残されたカバンの中に、聖書と、『キリストにならいて』本が入っていたことが伝えられました。それを新聞で読んだことをいまも記憶しています。聖書はいとして、『キリストにならいて』というのは、トマス・ア・ケンピスという中世の修道僧の書いたキリスト教の有名な本です。聖書、そして『キリストにならいて』が事務総長として、アフリカなどの国際平和のために飛び回っていたハマーショルドを支えるものであったのです。

2 聖書の伝播

さて聖書、旧約聖書と新約聖書、合わせて聖書ですが、これがいま私たちが皆持っている、いつでも、好きなときに開ける、読めるようになったのは、そんなに昔ではありません。

新約聖書、福音書に、イエス・キリストが、当時のユダヤ教の礼拝に出ていた時のことが書いてある箇所があります。

安息日（当時の礼拝は、土曜日）に会堂（シナゴーグ＝ユダヤ教の礼拝堂）に行き、座ると、その日読むために「巻物」が渡され、それを開いて、イエスが朗読する場面があります。そのときの箇所は、イザヤ書だったと、ルカによる福音書の四章にあります。

そこに「巻物」という言葉があります。それが旧約聖書です。三九の文書が何本かの巻物になって、会堂などにあったのです。ですから、自分の部屋で読むのではないのです。礼拝などに出て読み上げられるのを聞き、その箇所についての説明を一緒に

聞く、それが（旧約）聖書とのふれあいです。

イエス・キリストにとって、また弟子たちにとって聖書というのは、まさに旧約聖書のことでした。これに対して新約聖書というのは、イエス・キリストのことを福音として書いてあるわけですから、イエスが十字架につけられ、地上の生涯を終えてからできたものです。

イエスの弟子たちが、最初の教会の働きになったペトロやヨハネ、そして使徒パウロなどですが、イエスを神の子として、救い主として、キリスト（メシア）として宣べ伝えた、あるいは説教したといってもいい、その説教、書簡などを一つに集めたものが新訳聖書です。

この聖書を、こうした私たち一人一人が所有して、親しむことができるようになったのは、一般に、宗教改革以後のことです。

私たちの教会はプロテスタント教会です。今から五百年ぐらい前、ドイツにマルティン・ルターという人が現れて、当時のカトリック教会の在り方を批判し、新しく立ち上げた教会です。プロテスタントのプロテスタントというのは抗議するという意味なので、むしろ、聖書の福音、イエスの救いのメッセージを端的に伝えようとした教会として福音主義教会と称したほうがよいかも知れません。

私たちの教会の特色はいろいろありますが、重要な一つは、聖書を中心におく、聖書だけをすべての考え、教会の源泉とすることです。ルターの当時のカトリック教会は、聖書はあまり重んじられなかった、むしろ教会がそれまでやってきた伝統が重んじられていたのです。それに対してルターは聖書を中心におきました。聖書のキリスト教になったのです。聖書とともに、その説き明かしとしての説教を私たちは重んじます。それはルターから始まったのです。

ルターのしたことの中で、聖書を、自分のたちの言葉、この場合ドイツ語、に翻訳したことは、その後のことを考えると、きわめて重要なことであつたと言わなければなりません。ご存じのように、旧約はユダヤ人の言語ヘブライ語で、新約聖書はイエスやパウロの時代の世界言語ギリシヤ語で書いてあります。ですからふつうはそのままでは読めない。かなり早くラテン語に訳されました。これも民衆には読めないのです。ルターは、聖書をみんなのものとするために、自分たちの言語、ドイツ語に翻訳しました。これが、当時発明されたばかりの活版印刷、それで印刷され流布した。みんなのものとなったのです。

結局、このことによって、どの国の人も、自分たちの言葉で、聖書に親しむことができる可能性は開かれたのです。

3 聖書とともに

使徒言行録一七章に、パウロとシラスが、ギリシアのテサロニケの近くのベレアというところで伝道したときのことを書いてあります。

二人はそこへ到着すると、ユダヤ人の会堂に入った。ここのユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりがど

うか、毎日、聖書を調べていた（一七・一一）。

ここには、人ではなく、どんなに人間的に偉い人でも、有名な人でも、人ではなく

て、人の解釈でもなくて、聖書によって支えられていた人々の姿が鮮明に浮かんできます。私たちも毎日聖書を調べようではありませんか。

さて今日のテモテへの手紙二に触れておきましょう。今日の箇所は、とくに後半は非常に重要な聖句です。

この手紙は、使徒パウロが、自分の死が近いことを感じながら（四・七）、愛する弟子、伝道における忠実な協力者テモテに、信仰の慰めと励ましを語っているところです。パウロのまさに最後の勧め（小見出し）です。この中で、もつとも興味深いことは、パウロが、テモテの伝道者としての行く末を、聖書に託しているように見えるところです。テモテが聖書によって教えられ、守られ、導かれて、キリストに従いキリストに奉仕する道を歩んでいくことができるように、彼を聖書に預けた。お前を聖書に託す、任せたということです。

キリスト・イエスに結ばれて信心深く生きようとする人は皆、迫害を受けます。悪人や詐欺師は、惑わし惑わされながら、ますます悪くなっていきます。だがあなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだか知っており、また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことを知っているからです（一二～一五節）。

パウロは、テモテを聖書に託したのです。私たちの人生には、いろんなことがあります。つらいことがあります。勉強や将来への不安、今日、孤独ということも問題になります。頼みにしていた人と関係が悪くなるということもあります。歳をとつていくこと、健康の不安もあります。

でも聖書があります。神の言葉があります。聖書を読んでも分からないときもありますし、説明を聞いても理解できないときもあります。でも、そんなことはまったく問題でないのです。聖書があります。聖書がここにある以上、神様はいるのです。聖書がここにある以上、救いはあるのです。さらにパウロは、聖書についてここで重要なことを語っています。

聖書はすべて神の霊の導きの下(もと)に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえで有益です（二六節）。

聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれたということですが、それゆえ聖書は神の言葉なのです。なるほど外見としては一冊の本です。しかも、あまり形のよくない本です。しかしこれは神の霊、聖霊の働きによって生まれたものです。そしてイエス・キリストを証している言葉です。イエス・キリストは神の言葉です。それゆえこれを証しする聖書も神の言葉です。

宗教改革者ルターの言葉を、最後に紹介しておきましょう。「君の思いと感情を捨てて、この本を大切にしまえ。この本こそは至高至純の聖所であり、きわめて豊かな鉱脈であって、決してきわめ尽くし、掘り尽くせるものではない。これを大切に、神が聖書の中にも単純率直に置きたもう知恵を発見するように・・・」（卓上語録より）。私たち聖書の学校の生徒として、聖書に信頼し、教えを受け、戒められ、それによって神と教会に仕えてまいりましょう。

（二〇二三・八・二〇）